

## 第2分科会

# 子どもたちの“伝えたい”思いを育む保育を考える

～「絵の手紙」の活動を通して～



発表者	平田 奈美	(かいけ心正こども園)
指導助言者	武田 信吾	(鳥取大学地域学部地域学科講師)
司会者	門脇 知美	(かいけ心正こども園)
記録者	荒金 詩織	(かいけ心正こども園)
	田中 加奈子	(かいけ心正こども園)

## 1. 発表の概要

### <1> 主題設定の理由

本園では、子どもたちの表現方法の一つとして「造形活動」に取り組んでおり、その活動は本園の特色の一つに位置付けている。造形活動の内容としては、全身を使って気持ちを解放する色遊びや、心のうちにあるものを伝える描画活動など様々あるが、その中で今回は「絵の手紙」の取り組みについて紹介していく。

子どもたちは想像の世界で楽しんで絵を描いたり、思い思いに作品について話をしたりするなど、色々な姿が見られる一方で、活動に消極的な子どもの姿もある。そこで数年前より、子どもたち自身が思いを素直に表したり、またそれを“伝えたい”という気持ちをもったりするようにとの保育教諭たちの願いから「絵の手紙」の活動に取り組んでいる。活動をつづけていく中で少しずつ、自分なりの思いを絵で伝えようとすることを楽しむ姿が見られるようになってきたが、環境構成や題材、保育教諭の関わり方など課題も多くある。そこで今回は、“子ども”と“保育教諭”の両者の視点から「絵の手紙」の活動を振り返り、子どもたちの“伝えたい”思いを育む保育を目指して実践を行った。

### <2> 平成27年度

#### (1) 取り組みについて

自分なりに工夫して表現を楽しむ子、思い思いに作品について話してくれる子など様々な姿が見られるが、中には活動に取り組むことが難しかったり話しにくかったり、作品に自信がもてなかったりする子の姿もあったため、子どもたちが絵で自分の思いを楽しく表現できる活動はないかと思いを巡らせていた。

平成18年頃、新園舎を建設するにあたり他園へ見学に行く機会があり、その園で行っていたのが「絵の手紙」の活動であった。この活動なら、自分の中にある“伝えたい”思いを表現できるのではないかと考え、平成20年より園全体で導入することにした。導入するにあたり、自由画帳サイズではなく、子どもたちが身近な発見を気軽に描けるような小さなサイズの紙を準備し、何を描こうか子どもがイメージをもてるようなきっかけとしての問いかけ「大好きな人は?」「お休みの日何してた?」などを学年別に設定し、園独自の活動方法を考えた。

数年の「絵の手紙」の取り組みを通して、年長児の中に自分の思いを言葉で伝えることが苦手な子の姿が見られた。例えば、したいこと、してほしいことがあったとしても、その思いを相手に伝えられずに戸惑ってしまう子、言葉にできない子がみられた。そこで「絵の手紙」を通して、「どうやったら気持ちが伝わるのかな?」と子どもなりにコミュニケーションについて考えるこ



とが出来ききっかけになり、子どもたちの“伝えたい”思いを育て、自分の伝えたいこと、思いや願いを意欲的に相手に伝えることが出来るようになればと考え、平成27年度より「絵の手紙」の活動について見直すことにした。

「絵の手紙」を通して子どもたちとコミュニケーションをとる為に、それぞれの学年での目指す姿を設定した。そして、子どもたちが自分の思いを工夫して伝える姿を最終目標として年長児に設定した。今回は年長児を中心に焦点を当てて紹介したい。(年長児の活動映像紹介)

年長児は2歳の頃から絵の手紙に取り組んでおり、描いた絵を保育教諭に見てもらえる喜びや、日常の中から伝えたいことを見つける経験を多く積んでいる。今までの経験の積み重ねにより、保育教諭のシンプルな声かけで絵を描き出す子どもたちの姿や一人ひとりが時間をかけじっくりと取り組む姿が見られてはいるが、しかし、繰り返し活動が続けていく中で、子どもたちが絵を描くことだけに満足してしまい、保育教諭との言葉のやりとりが十分にできていないのではないかという疑問がわいた。また、絵を通して子どもたちとコミュニケーションをもっと取りたい、絵から子どもたちの表現や思いを深く知り、一人ひとりの理解につなげていきたいというさらに強い思いが芽生えた。

そこで、子どもたちの絵の手紙ファイルを見返してみると、次のような姿が見られた。

- ・題材によって色の使い方や人物の描き方が異なる子
- ・描く際に前後や横にいる子と同じような絵を描く子
- ・毎回同じような絵を描く子

「なんで描き出せないのだろう?」「なんで真似っこするのだろう?」「なんでいつも同じ絵を描くのだろう?」と、子どもたちの思いを知りたいと思うあまり、そのような表現をする子を特徴的な姿と捉えてしまっていたが、もしかすると私たちの関わり方を工夫することで子どもたちの考え方や育ちが見えてくるのではないかと、何かに気付くことができるのではないかと考え、特徴的な絵を描く子の姿に注目しながら実践することにした。

## (2) 実践例

※【事例3】毎回、同じような絵を描くD児の絵の手紙

【事例3】毎回同じような絵を描く子

例:「お母さんとおさんぽしている」



「お母さんとおさんぽしている」という絵を毎回見せ

てくれるD児。事前にD児の絵の手紙ファイルを見返すと、描く人物は同じでも服装や周りの風景が異なっていることに気付いた。その小さな変化について声かけすることを意識し、「これは誰?」などと声をかけ、「お母さんが大好き」という思いがたっぷりのD児の作品をしっかりと認めると嬉しそうだった。そして、一緒に今までの作品を振り返りながら、「今日の絵は虹が出ているね!」「こんなお花見たことない!かわいい形や色だね!」とその子なりの工夫を褒めた。一見、同じような絵を描いているように見え、「何を描こうか迷っているのかな?」と思いがちであったが、D児は迷っているのではなく、毎回表現したいことをイメージしながら工夫していることに気付いた。

## (3) 反省と考察

- ・子どもたちとの言葉のやりとりの仕方を一人ひとり変えたり工夫したりすることで、それぞれの子どもたちの思いや表現を知ることができ、個別支援の重要性を感じた。
- ・「上手に描けたね!」「素敵な絵だね!」などと、ただ認めるだけではなく、その子なりの表現

を具体的に言葉にして伝えることで、子どもも「先生、いっぱい見てくれるんだ。」などと、自分自身を認めてくれる喜びや安心感を得られるのではないかと思った。

- ・絵の手紙を通して“伝えたい”思いが育てられるよう、日常生活の中から題材を選ぶことで、子どもたちが描きたいものを描き出すきっかけに繋がることに気付いた。
- ・「また同じ絵を描いている」「気になる」などという、保育教諭の子どもたちの絵に対する思い込みをしていたことに改めて気付かされた。子どもたちは子どもたちなりに思いを持って工夫して描いているため、その姿や作品をしっかりと認めて共感していきたい。
- ・年少、年中、年長とそれぞれの学年で目指したい子どもの姿をもち、保育教諭間で活動後に話し合うことで、色々なエピソードや学年・クラスでの様子などを共通理解し、子どもたちの“伝えたい”思いを育む保育について学ぶことが出来た。

#### (4) 28年度に向けての課題

平成27年度は、絵の手紙は保育教諭と子どものコミュニケーションを図るツールとなっていたといえる。今後は園内だけの活動にするのではなく、他にも伝えたいと思える相手を増やしていきたいと思う。

以前、子育て支援の一環として土曜日の希望登園日に親子で「絵の手紙」に取り組んだことがあり、その際に子どもたちの描く様子を見たり、じっくりとお話を聞いたりする保護者の方の姿が印象的であった。

そこで園で描いた「絵の手紙」を家庭に持ち帰り、保護者の方との対話を楽しむなど、保護者を巻き込んだ活動を行っていきたいと考えた。

### <3>平成28年度

#### (1) 取り組みと実践例について

前年度の課題をもとに、「絵の手紙」の活動を家庭へ繋げていくことで、子どもたちの“伝えたい”思いがさらに広がっていくのではないかと考え実践を行った。

まず始めに、保護者にも絵を通して子どもたちとじっくり会話をする体験をしてもらおうということで、子どもたちが描いた絵の手紙を持ち帰った。そして、「これは何？」と普段、保育教諭と話しているようなやりとりを家庭で保護者にもやってもらい、アンケートを実施した。

#### 【アンケートの内容】

- ① やりとりをしている時の子どもの様子はどうでしたか？
- ② やりとりをした時に感じたことは？

#### 【アンケートの結果】

- ① やりとりをしている時の子どもの様子
  - ・嬉しそうに話してくれた
  - ・恥ずかしそうにゆっくり話してくれた
  - ・なかなか話してくれなかった
  - ・何を描いたのか忘れていたようだった 等
- ② やりとりをした時に感じたこと
  - ・想像力や表現力が豊かになった

- ・子どもの描く絵には意味があるのだと知った
- ・子どもの発想は面白く、親も楽しんで見る・話すことが出来た
- ・絵を通して子どものことを褒めることが出来た
- ・子どもの成長を感じられた
- ・画面いっぱいに描けるようになった
- ・年少・年中の時に比べ、絵が上達した
- ・見ただけで何が描いてあるのか分かる絵になった

子どもたちの思いを受け止め、絵を通して会話を楽しんだことが伝わってくるような回答の他に、子どもの技術的な面を重視する回答もあった。

アンケートの結果から、保護者は実際にどのように「絵の手紙」を通して子どもたちと関わっているのかを知るために、次は親子で絵の手紙に取り組んでみることにした。本園では在園児向けに、子育て支援の一環として毎月第3土曜日に“親子ではっぴーデー”という希望者参加型の親子活動イベントを行っている。今回（6月）は“造形遊び”をテーマに様々な年齢の子が来るということで、「絵の手紙」「段ボール遊び」「窓にお絵描き」の3つの活動を自由に参加できるように設定した。

子どもが絵を描いている時の親子の様子は、子どもが絵を描く姿を保護者がしっかりと見守っていて、「どんな絵が完成するか楽しみだなあ〜。」と期待を膨らませていたり、子どもが、「お母さん、一緒に描こうよ〜！」と誘って、一緒にお絵描きを楽しんでいた。また、なかなか描き出せない子に、「ママを描いてよ！」と保護者がリクエストする姿も見られた。また、完成した絵について会話をしている様子は、子どもが話す言葉を保護者が一つひとつメモしたり、「上手だねえ。」と褒めていたりしていた。また、作品を持ち帰って家族に見せることを楽しみにしている姿も見られた。完成した作品を見る機会が多い保護者にとって、製作過程をじっくりと見るのが新鮮で、「こんな風に描いていたんだ。」と知ることができ、子どもたちの頑張りや工夫している姿をしっかりと褒めていた。その反面、「上手だねえ。」の声掛けで会話が續かない親子もあった。

前回のアンケートの中で「昨年度に比べて…成長した」というような内容が多く書かれているのは、保護者が「絵の手紙」を見る機会が少ないことから、年単位で子どもたちの成長を感じてしまうのではないかと思われた。また、学年末にファイルを持ち帰るため、ほぼ1年前の作品を見ることになってしまい、保護者が「何を描いたの？」と問いかけても、子どもが「何を描いたか忘れた…」と言ってしまうのではないかと感じた。

そこで、記憶や、子どもたちの感じた思いが鮮明なうちに、たくさん会話を楽しんでほしいと思い、次は1学期分の「絵の手紙ファイル」を持ち帰ることにした。親子で絵を見返しながら、コミュニケーションをとり、その時の様子や感じたことをアンケートに答えてもらった。

### 【アンケートの内容】

- ①やりとりをしている時の子どもの様子はどうでしたか？
- ②やりとりをした際に感じたこと、また1学期分の「絵の手紙」を見て思ったことは何ですか？

### 【アンケートの結果】

- ①やりとりをしている時の子どもの様子

- ・1枚ずつ何を描いたのか丁寧に教えてくれた
- ・楽しそうに、恥ずかしそうに話してくれた
- ・話しているうちに、どんどんストーリーが展開していった
- ・得意気に話してくれた
- ・なかなか話してくれなかった 等

思いを伝えることが出来た子、なかなか難しかった子などそれぞれであった。

## ②やりとりをした際に感じたこと、1学期分の「絵の手紙」を見て思ったこと

- ・4月に描いた絵のことをしっかり話してくれて、子どもの記憶力に驚いた
- ・子どもと園での様子について話すきっかけになった
- ・子どもなりの発想やこだわりを知ることが出来た
- ・親にとっては一見同じような絵でも子どもにとっては1つずつ違ったイメージを持って描いている
- ・進級して3か月で自分の描きたいものをイメージして表現できるようになっていた
- ・絵が上手に描けているのが見られて楽しかった
- ・絵のレベルが上がった
- ・1か月に1枚の絵の手紙は少ないのでは…？（現在、年中組は月1回の取り組み）
- ・色をたくさん使って描いてほしい
- ・想像画などテーマのある絵を描いて子どもの発想を広げてほしい 等

子どもたちそれぞれの思いや表現を知り、やりとりを楽しんでいるような解答のほかに、子どもたちの技術的な面を重視する回答もあった。

「絵の手紙ファイル」を持ち帰った翌日には、「昨日お話したよ！」「いいなあ～私はまだ話してないよ～！」などと、満足そうな様子や話を聞いてもらうことに期待を持っている様子が見られた。

アンケートを見返してみると、嬉しそうに照れながらも話をしたことが伝わってきた。保護者も、年単位の成長ではなく、毎月の・毎回ごとの子どもたちの思いや成長を感じられたように思った。また、“あんなふうに上手に描いてほしい”というような子どもの絵に対する要望もあり、子どもたちの絵に対する“保護者の思いや願い”の強さを感じた。

## (2) 反省と考察

平成27年度と28年度の取り組みから、子どもたちの“伝えたい”思いを育む保育において大切なことや必要なことについて考えた。

- ・平成27年度の取り組みの中で、保育教諭自身に子どもたちの作品に対して「なんで同じ絵ばかり描くのだろう？」「また話してくれないなあ。」という思い込みや、「あんなふうに描いてほしい。」「こんなふうに話してほしい。」という願いがあったことに改めて気付くことが出来た。そのような考え方を変えていくことで、一見見逃してしまいそうな子どもたちの作品に対する“本当の思い”やそれぞれの表現の仕方について知ることが出来たことから、保育教諭の子どもたちの作品の見方・とらえ方について、見直すことが必要なのではないかと思う。
- ・平成27年度の取り組みの中で、“個別に対応する”支援の重要性を感じた。子どもたちの思いはそれぞれ異なっていて、「これは何？」と問いかけて会話が広がる子もいれば、以前の作品を振り返ることで会話を楽しめる子など様々であった。また、単に「上手だね。」だけでなく具体

的に、何がどのように上手なのか伝えたり、どんなところを頑張ったのか問いかけたりすることで、子どもたちの“伝えたい思い”が高まり、保育教諭との関係も深まっていくと思う。子どもの絵を知るのではなく、絵を通して思いや願い、その子自身を知ろうとする保育教諭の姿勢が子ども理解へと繋がっていくのではないかと考える。

- ・子どもたちの作品を通して会話を楽しむ活動を園内だけの取り組みでなく、家庭や子どもを取り巻く環境へと繋げていくことで、子どもたちがいつでもどこでも、物怖じすることなくのびのびと思ったことや感じたことを伝えてくれるようになるのではないかと思う。
- ・周りの保育教諭と相談しながら活動を振り返り見直していくことで、様々なことに気付いたり疑問に向かったりすることが出来た。今後も、周りとの連携を取り、広い視野を持って活動していきたいと考えている。

### (3) 研究のまとめと今後の課題

- ・今回の研究を通して、子どもの絵に対して「気になる」という保育教諭の思い込みや疑問を持ってしまっていたことに気付くことが出来た。そして、個別に支援していくことで子どもたちの作品に対する見方も変わり、子どもたちのそれぞれの思いを引き出せるようになった。また、会話も保育教諭が一方的に話すのではなく、子どもたちなりの言葉で伝えてくれる姿が見られるようになり、引き続き、園内研修等で活動を振り返りながら研究していきたいと思う。
- ・作品展や講演会などで、子どもたちの作品の捉え方について知らせてきたものの、保護者の「こうなってほしい」という願いが強いことをアンケートや活動の様子から感じた。今後、保護者に子どもの表現のどんなところに成長を感じたのか、どんな思いで子どもは絵を描いたのかなどということを「上手」だけでなく、具体的に言葉で知らせる大切さを園の思いとして伝えていきたいと思う。
- ・アンケートの中には「話を聞く余裕がない。」「なかなか話してくれなかった。」「返却期間が短い。」などという回答があったことからコミュニケーションツールとしての絵の手紙の活動の趣旨が保護者に伝わりきっておらず、こちらが押し付けてしまっているようにも感じた。今後は、親子で「絵の手紙」の活動を楽しめるような工夫を考え、さらに子どもたちの“伝えたい”思いが広がっていくように取り組んでいきたいと思う。また、アンケートの結果について手紙を配布するなどして知らせ、園と保護者との関わりについてさらに展開していきたいと思う。

## 2. 研究討議

### (1) 発表内容に対する質疑応答

(Q) 美哉幼稚園・西元先生

技術の習得に関して園ではどのように捉えて子どもたちに指導しているのか。

(A) 園の造形活動としては“目が描けようになる”、“手だけでなく指先まで描けるようになる、”という技術の習得は目的としておらず、遊びの中で子どもたちが気付いたり発見したりすることを大切にしている。

そのため、「絵の手紙」の活動では技術の習得をねらいとして行っていない。

(Q) 美哉幼稚園・西元先生

“絵の見方”というのを保護者の方にどのように伝えていっているのか。

(A) H28年度に行った絵の手紙についてのアンケートの手紙を、やり取りのポイントや言葉かけの事例を記載して配布した。また、作品展の際に講師の先生に来て頂き、絵の見方のアドバイスや講演会を行うなど、機会を設けている。

(Q) 良善幼稚園・市原先生

子ども達に描く道具を出す際、保育教諭はどのような観点で選んでいるのか。また、見分け方、使い方の指導、出す色の数はどのようにしているのか。

(A) 絵の手紙で使う教材に関しては、学年別に個人持ちとして持っているものを使用している。年少児は長さが短くペン先が太いサインペン、年中児は年少児に比べ、長さが長くペン先が細いサインペン、年長児は全芯色鉛筆。筆圧等を考慮し、それぞれ子ども達の発達に合わせたものである。絵の手紙だからと特別感を出すのではなく、普段から使用している描き慣れたものを使用したいという保育教諭の思いがある。絵の具の活動に関しては、絵の具を使ってどのようなことを子ども達に楽しんでほしいか、また、活動のねらいによって使用する教材を使い分けている。描画の際は筆を使用したり、色遊びの際はローラーや全身を使ったり等。子ども達の様子を見て日々教材研究を重ねている。

(Q) 愛真幼稚園・福谷先生

「絵の手紙」の1番最初の活動について、どのようにして子ども達に伝えて取り組んだのか。

(A) 活動について順を追ってしっかりと伝えることを大切にしているが、活動に戸惑っている子や、なかなか描き出せない子の姿が多く見られるというところからのスタートである。個別に寄り添い、戸惑いや不安がなくなるよう楽しい雰囲気を意識し、積み重ねていくことで年長児のような姿に向かっていくことができるよう支援している。

(Q) 美哉幼稚園・西元先生

一斉保育と自由保育とあるが、技術の習得の時間と、習得した技術を使った自由な時間をどのように区分けをしているのか。また、造形だけでなく園の保育の進め方として、区分けをせずにそのような時間をどのようにして設けているのか。

(A) 技術の習得をねらいとして行っている活動もあるが、遊びの中でということに重点を置いている。立体等の制作では、作り方の工程を見せたり、図面上に切り開いたものを提示したりしており、また、絵の具を使用する際はローラーの使い方等も知らせている。子どもたちが習得したもので楽しみながら取り組めるよう区分けをし、積み重ねを大切に取り組んでいる。

## (2) グループ討議

### 1. 「絵の手紙」を描いてみよう！ 【テーマ：休みの日何してた？小さい頃の思い出等…】

テーマに沿って、実際に絵の手紙を描いてもらった。その後ペアになり、順番に子ども役と大人役になって、絵の手紙を通してやりとりをした。

※聞き役は「上手」以外の言葉で、相手の作品を褒める、認める。

→「絵の手紙」を実際にやってみた感想を話し合う。



### 2. ワークショップ 【6グループに分かれて討議を行った。】

- ① 絵の手紙の中で子どもの思いを引き出すために大切だと思うこと。
- ② 日頃、コミュニケーションをとる上で大切にしていること。

#### ① 絵の手紙の中で子どもの思いを引き出すために大切だと思うこと。

- ・子どもの言葉に共感する、笑顔で受け止める。
- ・子どもたちと同じ目線の高さで話を聞く。
- ・子どもたちが安心して取り組めるようしっかり見守る。
- ・スキンシップをしっかりとる。
- ・子どもが戸惑っている場合は、こちらから問いかけたり保育教諭の思いを伝えたりすることで話しやすい雰囲気作りをする。
- ・子どもからの話をじっくりと待つ。

#### ② 日頃、コミュニケーションをとる上で大切にしていること。

- ・子どもたちに共感する、笑顔で接する。
  - ・スキンシップをしっかりとる。
  - ・保育教諭の表情、言葉遣い、子どもの目線に合わせて話を聞く。
  - ・集団遊びなど集団で関われる時間と、子どもと保育教諭の一对一の関われる時間のバランス。
- 共通点として、日頃からしっかり子どもたちとスキンシップをとり、子どもの思いに共感したり笑顔で受け止めたりする、ということが大切であるという意見が多くあがった。



### 3.指導助言（全体まとめ）

#### ◎「絵の手紙」の活動を捉える3つの観点

##### ○「表現」という言葉の意味

辞書で調べると、

「表」…「衣」と「毛」から成っている。表に出ているという意味を持つ漢字。

「現」…「玉」すなわち「玉」を示し、目の当たりにしているという意味を持つ漢字。

「表現」…心に思う事、感ずることを行動に、また形にすること。表に出てきて見える状態。



表に出てきて見える状態…つまり、表現している主体だけではなく、見ている存在を含んでいる。

表現を英語で表すと、expression→外へ押し出す、気持ちを押し出す

反対に impression→内へ押し出す、印象

となり、共通しているのは内面的なものを外へ出していくことである。ただし、日本語で言う「表現」は、それを見る人の存在も暗に含んでいる言葉なのである。「木、雲が表現する」のように、人ではないものが表現するとおかしいと思わないのはなぜか。それは、見る人の存在（保育の場面であれば、それは先生、家族、友だち）があるからである。表現したものに隠されている子どもの内面を私たちは見ようとしており、共感的に関わってもらうことで子どもたちも嬉しさを感じる。では、伝えたい相手にどう伝えるか…？

##### ○「伝えること」と「描くこと」の関連

林健造氏が示した造形教育における三系論は、今もなお幼児の造形教育に影響を与えている。

三系論	⎧	想像（頭）	絵を描く際に絵本などを用いて想像を膨らませて入る保育もあるが、 技術、伝達から入る保育の流れもある。
		技術（手）	
		伝達（心）	

技術の系、シンタックス（約束事）があり、基底線や構図は発達の過程の中で学んでいく。

仲間や教師や親に自分の見たり考えたりしたことを伝達し、他人の心を通過して共感を得てもう一度自分に返ってくることで、表現の喜びや能力が螺旋階段のように上昇し、育っていく。つまり、イメージすること、描くこと、伝えることは分けられないものである。加えて、子どもたちは友だちとのやり取りから描き方を学ぶこともある。

##### ○「絵」「言葉」「文字」の関わりと境目



絵の手紙の活動は、絵と絵文字の丁度間に位置する活動。

絵的なものでもあり、絵文字的なものでもある。

## ◎効果、評価、今後の課題

絵の手紙という活動は、自分の絵を見てくれる存在が顕在化するという。その時に、自分の描きたいものを形にしていくということが共感的に受け止められてきて、充実感を得られることにつながる。また、見る人に「もっと自分はこういうふうに伝えたい。」という気持ちを芽生えさせることにつながっていくのではないかと考えると、それは、子どもにとって“絵”であり“文字”や“言葉”であるような絵の手紙だからこそ生み出されるような関連性があるのではないかと。

今回発表された取り組みは、子どもと保護者、保育教諭の三項関係で捉えると、保育教諭と子ども、あるいは、子どもと保護者に働きかけていく取り組みである。保育教諭が子どものことをもっとよく知りたい、今日の講演の中でもあった『子どもから学ぶ』ということにつながっていく話である。子どもと保護者を巻き込んでいくことで、普段の園での様子だったり育ちだったり、保育教諭と保護者との間で子どもがどう育っていくかということのイメージの共有につながっていくのではないかと考える。これを、園の文化として保護者と保育教諭が子どもの表現をいかに受け止め合ったり、共感しあったりというところまでもっていくには、さらなる事例の積み重ねであったり、職員同士でその積み重ねを共有していくところがさらに今後必要になっていくのではないかと思う。

